

【 ASEP2015 】 現地レポート・1日目 (12/25・金)

台湾の既に到着の皆様、まだ日本でこれから出発の皆様、
そして残念ながら参加できなかった皆様、



いよいよ ASEP2015 がスタートしました。

例年になく暖かいクリスマスの25日を迎え、関西空港もどことなく季節感のない雰囲気ながら、イン・アウトの旅行客だけは多くこれまた例年になく混んだセキュリティチェックを抜けて、早めに搭乗予定の中華航空台北便ゲートへ。

日台双方の観光人気か昨年より台湾便はどれも早くから予約で埋まり、そのせいか、関西発着の台

湾便は台北、台中、高雄など LCC あわせて30便近くになる大盛況。

また、高校生の海外修学旅行先も台湾人気で台湾政府関係によると、今年いっぱい台湾を修学旅行で訪れる日本の高校生は3万人にものぼるという発表もあり空港では制服姿の高校生もちらほら。

定刻を少し遅れて満員の乗客を乗せ、約3時間後には雨の上がりかけた台北桃園国際空港に無事着陸。ほぼ同時に名古屋からの JAL 便で到着された西先生引率の南山国際高はうまくパスポートコントロールをすり抜けられたようだが、私はちょうど大陸本土便と重なって長蛇の列に巻き込まれる。台湾入国管理官の手際よい誘導でどうにか最悪は避けられて、荷物受取へ。すでに何周もまわっていたような・・・。



そうこうして、南山国際グループと落ち合い、ホテルチェックインまでの時間は台湾歴史フィールドワーク。

今年は228記念館と同じ公園(228公園)の中にある台湾国立博物館。228記念館はここ毎年の訪問で日本統治時代とその後の国民党統治の違いの認識を再確認。

そして、今回初入館の博物館。内容はともかく、建物が統治時代からのネオルネッサンス様式の重厚で

威厳のある建物で内部の装飾も大変精緻ですごく、ある意味で展示内容を凌駕していた。

台湾は近年、各地で日本統治時代の残存建築物を保存活用する動きにあり、この時期の建物は奇異ではあるが本国日本より多いかもしれない。



その後、ホテルにチェックインした後は、先入りした影戸先生と日本福祉大の学生さんといつもの和昌茶荘で待ち合わせ。

いつになく日本人客でいっぱいの中、試飲しつつ1年分の自分使いやお土産のお茶を購入。そして、夕食は鼎泰豊本店の小籠包。近年日本各地に支店はできているが本店で食する各料理は格別とみて生徒・学生さんは大満足のように。

その後、台湾初体験の生徒・学生をつれて士林夜市へ。

このアジアな熱気を感じて、顔の大きさもあるフライドスパイスチキンを食べたり、格安のTシャツを買ったりと高大生それぞれに夜市を満喫したことは確か。



それにしても、夜の10時になっても地元の制服姿の高校生を含めて老いも若きも人人のすごい熱気と活気はなんだろうか。

同じような人ごみでも日本ではこれほどの雰囲気はなく、ある意味整然と事が流れている。とにかく「アジアのあく」がここ台湾にはあり、そしてそれを一番実感できるのがここ士林夜市だ。それは臭豆腐のにおいを「夜市の香り」と思えるほどに台湾に慣れたのか

もしれない。

ASEP台湾は16年目。今年、日本参加者は生徒と学生、教員を合わせて150名近くの過去最大の参加人数となる。

さて、あすからいよいよ高雄入り。さきのりグループも含めてどんなASEPになるのか。

今年のテーマは図らずも「Traveling and Learning」。

初日、台北の Traveler 体験をしますますプレゼンに興味わいてきた。

お待たせしました。あす、26日から「バーヨウコウ」オープンです。

皆様、ご来店を。

では本日はこのあたりで。

【 ASEP2015 】 現地レポート・2日目 (12/26・土)

例年の時間に例年のように書いてます。

26日はいよいよ台北から高雄へ移動。

若干肌寒い台北駅の新幹線乗り場へ。

例年の新幹線は大きなトランクを持った地元の方が多く新幹線車両の荷物置き場に我々のトランクを納めるのも一苦勞なのだが、今年は楽々とおける。

台湾高鐵はご承知のように日本の新幹線を使っているのだが、車内は若干異なっていて例えば、車内のドアは押しボタン式の自動ドア。また、車両の前後にトランクなどの大型荷物置き場があって、座席数も少なめ。

乗り心地は全く同じの新幹線で、車内では南山国際のプレゼンコンセプトのチェックも怠りない。いくつかの駅に止まり、1時間30分程度で列車はスピードを落として終点高雄の左榮駅に滑り込む。



そして、改札の外には歓迎のプラカードを持った南山国際高の相手校、樹徳家商高の先生と生徒さんたち。毎年の光景だが、いよいよ彼らはホームステイをしながら最終プレゼンをすったもんだしながら作り上げていく。

西先生と私は、生徒さんと別れてホテルへ行く予定だが、いつも連れて行ってくれるウー先生が来ていない。

なんとラッキーな。実は過去のレポートを憶えている

方はご承知の通り、バイクのミラーに擦ったり、道を間違えたりでタクシーで行けばそこそこの時間の倍近くかかるのだ。

実は、ただ駐車場が混んでいただけで、後からきっちりあらわれました。

と言う訳で、今年もウー先生の車でホテルまで。

追い越し車線を30Kmの低速で走って後ろからクラクションを鳴らされたり、急に広い道で加速したり、で酔ったことのない私が車酔いをしてしまった。

ホテルは5星クラスの福華大飯店。身分不相応な感もあるが、教委斡旋補助なので毎年当番校が威信とメンツをかけて当番校近くの高級ホテルを取ってくる。

3時チェックインまでは西先生のお土産買出しにお付き合い。

パン職人世界大会で二位になった大人気のベーカリーにあるパイナップルケーキがそのお目当て。ホテルから30分近くかけて、高雄の日常の街歩きを満喫しながらお店に。

3年前の当番校高雄商業の横を通り抜け、色々な店先の段差のある歩道を駐車した多くのバイクを避けながら進んでゆく。

意外に混んでいない「呉寶春」でお土産を買われた後はタクシーでもどってチェックイン。

今年はちゃんとしたスイートに通される。今晚から29日の晩まではここが「バーヨウコウ」になるのだ。

西先生は樹徳家商に指導に出向かれ、私は車酔いを回復させるためスイートのソファで休養。いつの間にか26階から見降ろす街の景色が灯りに包まれた夕刻、お戻りになった西先生とこれまたいつものトニー先生のレストランへ。



高雄女子高横の「満家小館」。

エレベータの中で奈良育英の宮下・永野先生とばったり。交流校セントポールでこれから夕食を兼ねた打合せとの事。

フロントロビーに降りると、法隆寺国際の山本先生と林先生、そして義守大のダニエル先生一家。そこに久々学生をつれて参加の立命館の坂本先生とロビーは ASEP 関係者であふれかえっていた。

皆様との挨拶もそこそこに山本先生と林先生も加わってトニー先生のレストランへ。

週末の夕方満席状態の「満家小館」は飾り気のない台湾の日常を見せて、その中に入っていける幸運はトニー先生とこの ASEP で知り合えたことに尽きる。

初来店の五十嵐先生も山本先生もこのビールに合う台湾家庭料理に大満足のように何より。



そうして、ホテルに戻ると向かいにあるファミマでバーヨウコウの仕入れ開始。

おつまみとビールなど仕入れて準備をし、ほどほどに皆様が集合して、一年振りの「バーヨウコウ」開店。色々な先生方の色々なお話が一つになり、またあちらこちらでと続き、本当に来てよかったという感想が漏れてくる。

12時を回るころにはぼちぼちと部屋に戻る先生がた。台湾各地で色々なプロジェクトの伏線を実施してや

っと高雄に入られた米田先生が来店された頃はやはり交流校との「熱い」夜を終えられた名古屋商業の先生方にもおいでいただき、ますます盛り上がり、追加の買い出しに。

そうして、あの ASEP 初期のように2時前まで開店という久々に活気のある「バーヨウコウ」だった。

明日は、公式行事の教員シティツアーとフォーラム。

日本側事務総長の池田先生にどんな格好で行けば？と質問すると、水着や海パン以外のカジュアルならOKということで、高雄港めぐりのようです。

あすは、8:30の集合時間に遅れないように今日はこのへんで。

【 ASEP2015 】 現地レポート・ 3 日目 (12/27・日)

皆様

高雄は晴れの若干暑めだけれど過ごしやすい、ちょうど日本の5月晴れのような日曜日を迎えました。

本日より国際教員向けの公式行事が当番校である高雄高校の主導で始まる。まずは午前中のシティツアー。



毎年各当番校がそれなりに趣向を凝らして色々な場所へと連れて行ってくれるのだけれど、10年以上も参加していると、ほぼ行きつくして、また、プレゼン指導も2日前で山場を迎え欠席する先生も傾向として多かったのも、せっかく気合の入った当番校に申し訳ないので引率のない先生や複数参加の先生はなるべく参加がお約束。

ただし、今回は初めての高雄港クルーズなのでま

た新たに高雄市を認識できるいい機会だった。

旧高雄港の旧倉庫群からクルーズ船は出航なのだが、近年このエリアは再開発されアートやおしゃれな店など芸術街として再開発され、10月からは架線なしのライトレール(路面電車)も開通となり、この世界でも5本の指に入るといふ高雄港を抱えた高雄市はそれなりに発展している様相を見せている。



ASEP地方参加の生徒は初めての高雄の高層ビル街に想像したより大きな町なのに驚くという話を先生から聞く。こうして、海から高雄市を眺めるとビル群のスカイラインが際立って改めて台湾第2の都市であることを再認識した。

昼食は高雄ならではの海鮮料理。いつものようにワサビ山盛りの刺身でスタートして、何品か出た後に干しエビの入った美味しいチャーハンの登場。ここで日

本の中華屋さんならこのあとは杏仁豆腐のデザートで終了、の想定で美味しいチャーハンについてお代わりのてを出す日本人先生。ところが、裏切られました。なんとこの後、天ぷらや具だくさんの海鮮スープなど登場してデザートとフルーツでやっと終了。

食べ残しはこれまた、いつものようにドギーバッグならぬビニール袋に入れての協力した高雄高PTAのお持ち帰り。つまり、皿が空、はお客様に失礼、食べ残しがないと本当にもてなしたことにならない、と言うこちらのおもてなし。

思えば 2000 年当初の ASEP の公式晩さん会。出される料理が珍しくこれまたおいしいものだから日本人先生たちがつつい皿に手を出して空にして、あわてて台湾側が料理を追加するという事があったのを思い出した。

とにかく、こちらのホスピタリティの基本は食べ物でもてなす、で、今回初回参加の先生方にバーヨウコウで「食事と食べ物をどんどん進めてくるでしょ？」と聞くとみなさん一樣にお腹を押さえて、「そうです！」とうれしいような当惑したような表情。

こうやって、訪問地のプロトコルを認識するのも国際交流の要素の一つ。だから今度は WYM で同等・同様に食事だけでなく色々な工夫を凝らした「おもてなし」ができるはずだ。



こうして、満腹の昼食を終え、午後からは高雄高校に場所を映してティーチャーズ・フォーラムの開始。休日の高雄高校は ASEP など登校はしているが私服の生徒が時折いて、広いグラウンド、伝統のある煉瓦造りの本棟もひっそり。お馴染みのマスコット犬たち、じつはただ生徒が餌をやったりして居ついた野良犬たち、も相変わらずのんびりとあちらこちらに寝そべっている。

フォーラムの第一部は台湾の映画について。高雄高校出身で台湾でも有力の映画評論家で大学講師のライアン・チェン氏が講師。

台湾の歴史と連携させながら台湾映画史の変遷を語っていただいた。近年の台湾映画に若干興味のある身にとって、また日本で情報の少ない台湾映画の歴史が知れて大変興味深かった。

中でも、何年か前に樹徳の先生に連れて行ってもらった墾丁が舞台の2008年の「海角七號」が台湾映画史にとってはエポックメイキングな作品だ、とのこと。



第二部は伝統的な墨絵を扇子に描く作品と提灯に文字を描くワークショップ。

インドネシアの先生がた、色使いがとってもきれいです。

公式行事が終了した後は一旦ホテルに戻って、今回参加の当社の須藤の高雄到着を待って夕食へ。

須藤は ML での参加紹介にもあったように、2002 年

渡辺先生の宇都宮大生として参加経験を持つ OG。

先行の影戸先生、吉田先生、五十嵐先生の後を追って、昨日と同様のトニー先生の店へ。

同行で今川先生と校長先生も。

とにかく家庭料理で日本人に親しみやすい、あまり脂っこくない料理に今川先生も絶賛。



こうして、「バーヨウコウ」は22時の開店。

坂本先生や初参加の須藤、また羽衣の田中先生をくわえて後はお馴染みの先生方で昼間では得られない情報のコミュニケーションの輪が続く。

途中、シルビア先生からビールの差し入れがあり、相変わらずのマシングントークで10分間くらいはしゃべりっぱなしのエネルギーあふれるお話。あすの授業見学ではタブレット利用もしていただけるとのこと。

そうこうしてるうちに、拉致され続き、の上杉先生がご来店。最後の拉致先、お馴染みの三民家商の元 PTA 会長宅から2人でヘネシー1本をまるまる空けて「バーヨウコウ」にたどり着かれた。毎年の拉致お疲れ様です。

それにしても、既に学校同士でもお互いの交流先も異なっているのに、ずっと上杉先生を誘う義理堅さ。もう一つの台湾ホスピタリティを実感した。

そうして、今晚も昨年に増して、ご来店で盛り上がり。

このように、非公式であるからこそ得られる情報とコミュニケーションの輪の広がり「バーヨウコウ」を毎年開店している意味に尽きる。

何か日頃からどういう風に生徒の英語学習やグローバルマインドのモチベーションを上げるか、で悩んでいた先生が今晚のわいわい、がやがやのなかで解決のヒントを頂いたらしく、「このまま進む自信ができました。」と言って閉店時間に部屋に戻られたのが印象的でした。

ここは“You can't always get what you want but if you try sometime you find you get what you need.”のゆるーい世界だけれど、求めるものは必ずここにある、が10年以上雇われマスターで「バーヨウコウ」を続けてこられた故なのだ。

そう感じていただける先生が一人でもいる限りはやめられないなあ、と感じた。

明日はいよいよプレス・カンファレンス、記者発表で本格的な公式行事に突入。

私たち(須藤と)はダニエル先生のご協力で五福小の英語村を 8:30 から見学して記者発表、15時からシルビア先生の英語授業見学与公私併せての予定をこなし、夜は公式晩餐会。

では明日も早いので、このあたりで。

【ASEP2015】現地レポート・4日目(12/28・月)



皆様

4日目は11時からプレスカンファレンス。実質対外的にASEP2016の開会を広報するイベント。

その前に、今回参加の当社・須藤の希望で五福小学校のEnglish Village(英語村)を見学。

高雄市における英語村の創設にアドバイザーとして加わったという、ダニエル先生にアレンジを

お願いしていた。

8時のダニエル先生のピックアップで始まったばかりの学校へ。折から校庭で朝礼の最中。校長先生がまず見せてくれたのは、五福小の中国独楽まわしチームのパフォーマンス。なんでも全国チャンピオンの実績を持つという。ほとんどノーミスでのパフォーマンスを見た後は早速

英語村へ。

台湾も日本同様に近年の少子化での空き教室利用の意味も一つにあり、1棟全体が

英語村となっている。教室ごとにそれぞれのテーマで、KFCのファストフード、動物病院、コンビニ、地下鉄の改札、飛行機の搭乗と機内、中国劇の舞台、ホームステイ想定 of 西洋の家の部屋、全校に放送も可能な、天気予報放送スタジオとまるで本物そっくりの

時間	五福英語村 遊學流程表
9:00 - 9:40	9:00 前抵達 前測・經驗調查・發覺關係・課程說明(Opening)
9:40 - 10:20	Class 1
10:20 - 11:00	Class 2
11:00 - 11:20	Break (下課休息)
11:20 - 12:00	Class 3
12:00 - 13:30	Lunch Break (用餐及午休)
13:30 - 14:10	Class 4
14:10 - 14:30	Closing Ceremony & Award 後測・經驗調查・頒獎
14:30	Time to go home. (回家)

施設の環境で想定される英語コミュニケーションを実践する。高雄市全域で6校に併設され、各地域の学校の5年生が1日かけて利用する。

この五福小英語村は近隣11校が受け持ちで本日も他校から。

実はここには過去2回訪問している。その後の高雄市広域合併により予算が削られて結構大変だと聞いていた。高雄(台湾)では所得格差が大きく、余力のある家庭の子供は早くから英語塾や海外サマーキャンプと実際の英語に触れる機会がおおいが、そうでない子たちのため、居ながらにして、



日常とは異なる海外に似せた、英語を使わざるを得ない環境下でコミュニケーションを教えるというもので、子供たちのモチベーションを上げる仕掛けは飛行機のシート、トイレ、カートなどはチャイナ・エアから、ケンタッキーのサンダーおじさんと内装はフランチャイズのオーナーからの寄付という事で全て本物で現実感が半端ではない。コンビニの商品も賞味期限切れの本物の食品を並べている。

前回訪問した際にはネイティブ教員4人だったが現在は1人のみ。

台湾各地ではすでに中止している中、ここ高雄だけで頑張っている、進学の手配のない自由度の高い小学校の時期こそ将来役立つと信じて続けている、とプレスカンファレンスの開かれる高雄高校まで送っていただいた車中で校長先生が明言されていた。

ただし、正課の英語授業は3年生から実施で届出をすれば1年生からでも開始できると、こちらは勉学に熱心な台湾は失われていない。



お昼前の高雄高校は昨日にも増して青空で高い気温の元、講堂でのプレスカンファレンスが始まる。例年よりもテレビ等の取材関係者が多くいるようで文字通りのプレスカンファレンス。

高雄高校音楽科のカルテットの演奏をオープニングに、来賓の挨拶、校長の挨拶、そして参加海外校とそのホスト校のグループの代表が

壇上で紹介され、そしてよくわからないけれど、地元

参加者に人気の着ぐるみが観客席より登場して、記念撮影をして終了。

いつものようにbuffetの軽い昼食はなく、お弁当が配られる。各校に持ち帰ってプレゼン準備をしながら食べるのか、会場で食べるのか、それぞれに任せて簡潔であっさりとしたプレスカンファレンスだった。

影戸先生が高雄高校近くの三鳳中街という乾物問屋通りでお土産調達、そしてそのまま外で食事を、という事で吉田先生、五十嵐先生、須藤さんをくわえてお伴する。所謂、台北で有名な乾物街の迪化街の高雄版で規模は小さいが値段も若干安い。年末、多分旧正月の、ともなれば高雄市民の買い出しでいっぱいになるという通りも月曜日の昼下がりには買い物客も少なく、関係なく進入してくるバイクに気を付けながら、見繕っていく。

私は台湾特産の黒皮落花生を入手。量り売りの単位は「1斤」で約600gで150台湾元なので600円くらいと安価。日本では高価な干しエビも1/4くらいの価格であり、これは須藤さんがゲット。以前に私も買っているのでも味は保証できる。

影戸先生と五十嵐先生は息子が愛知の大学に留学していた乾物屋で毎年のようにカラスミをお買い上げ。突然やってきた日本人の集団に初めは怪訝そうに対応していた店番の母親も、影戸先生が「前に会った名古屋の大学に留学していた息子さんは元気か？」と中国語でたずねると、ハッと表情が変わってこれまた空港や台北で買うのとは驚くらいに差のある価格でカラスミを出してくる。こうして、次は昼食だが、何年か前に同じようにこの店を訪れて、そしてこのお母さんに「このあたりでどこかおすすめの昼食の場所は？」と聞いて教えてくれた駅裏のレトロな食堂へ。グーグルマップを見ながら20分程度あるいて到着。



「驛站食堂」というオープンな昔の駅裏食堂雰囲気
そのまの食堂で名のない家庭料理を食する。文字
通り高雄駅の線路のすぐ横で時折通り過ぎる列車の
パンタグラフや屋根が間近に見える。

つぎの予定は15時より高雄女子高でのシルビア先
生の英語授業見学。ここでは須藤さんの英語授業も
予定。

ちょっとばかりホテルで休息で、五十嵐先生とホテル

近くにある「50嵐」というタピオカミルクティーで有名な店に。

五十嵐が台湾に来たのでやっぱり「50嵐」には顔出ししとかないということで。

ちなみに五十嵐先生とこの台湾全土にフランチャイズで多くの店舗を持つ「50嵐」は経営上は何も
関係なく・・・。



予定通りに15に高雄女子の校門にはシルビア先生
がお出迎えて、授業が始まる前にまず授業の概要の
お話。どうも LMS を利用した英語授業で動画教材の
Youtube リンクのアップ、スマホを利用したアンケート、
小テストの集計表示、課題提示、生徒とのメッセージ
などICTをふんだんに利用した内容。

開始の時間には、日本の学校と同じくらいの広さの
教室で黒板半分の前面をスクリーンに天吊りプロジェ

クタ+電子黒板機能が設備され、これまたデジタル教科書での提示で授業が進んでいく。導入は
Show&Tell で自分の関心のある話題についてのショートプレゼン、3名ほど。発音、スピーチは押
しなべてレベルは日本の高校生より少し上。



そして、教科書の内容へ。台湾で自分の信念を曲げ
ずに著名なダンサーになった人のストーリーで、途
中で各自のキャリアでの将来の夢を、説明されたM
LSシステムの機能で絵でスマホに書き、発表。そし
て授業の締めは須藤さんによる日本のダンサーの紹
介授業。教育学部英語科卒だけに初見でも女子高
生相手に短い時間とは言え堂々の授業。

終了し、教室を去るときにも、「須藤先生」と一緒に写
真を撮ろうという生徒達に囲まれて大変な状態に。シルビア先生はすぐ次の授業があるのでそちら
へ。



こうして、パワー一杯のシルビア先生の授業を見学してホテルに戻り、公式晩餐会へ。

そして、ばーヨウコウへ。と今日は文字通り朝から晩までのスケジュールで、レポートももうこの時間。

明日はいよいよ発表本番。で8時出発なので大事を取って今日はこのあたりで。

【 ASEP2015 】 現地レポート・5日目（12/29・火）



今日も北回归線の南のある高雄らしい晴れ渡った爽やかな朝。いよいよプレゼン大会当日。

ホテルより8時30分発の迎いのバスでインターナショナル・ティーチャーは会場の高雄高校に向かう。もともと、ホテルから高校もそう遠くなく歩いて20分から30分で着く距離である。

早速学校に到着すると開会式のある体育館へと誘導される。

入り口には参加の生徒・学生がこの数日間の協働作業ですっかり打ち解けあい交流校同士のグループになって、それぞれに集まり、会場に入り、これから始まる集大成のプレゼンへの興奮と不安のせめぎ合いを打ち消すように一層にぎやかに話し合っている。



会場いっぱいに参加者が着席する頃にいよいよ開会式の始まり。

最初は高校生ダンスチームのオープニングパフォーマンス。大きな歓声と拍手に包まれ、高雄教育局局長、高雄高校校長の開会挨拶に続いて、この ASEP を高雄市で始める切っ掛けとなった名古屋での WYM の創始者である影戸先生の挨拶へと続く。

初めて高雄 ASEP に来たのが 2000 年、その前年の WYM から係ってきている者にとって、影戸先生のこの ASEP における位置は単に海外参加の代表見あいではなく、15年以上も開催できたことに大きく貢献しているのを高雄市側も良く承知している表われた。



さて、影戸先生は英語だけでなく、流暢な中国語も使って会場の参加生徒・学生にこの ASEP に対する心構えを話される。

今年は「Who are you?」という問いかけから始まって、(参加者は)「Be a challenger, Try an active listener」という言葉で締められる。参加者の台湾を含めた生徒・学生はこの言葉の真意をどのくらい理解できただろうか。少なくとも、今年を含め毎年の WYM に参加

している日本の学校の先生方はその実行員会を含めた活動の中でこの言葉がどういう意味を持っているか

を根底に置いたご指導をされているはずだ。

プレゼン大会とは言っているが ASEP も WYM もただの順位付けのコンテスト大会ではない。

5か国、54校、聴衆を含め700人以上が参加した今年の ASEP2015 であるから、限られた発表とはいえ34グループのプレゼンは否応なしに2会場に分かれて進行する。

A会場は開会式の体育館下のホール、B会場はそこから校舎をはさんで反対側のコンサートホールの2会場だ。



昨年は審査員だったので1会場固定でのプレゼンしか見るができなかったが今年は行き来する段取り。

まずは、一昨日、プレスカンファレンスが行われた B 会場のコンサートホールへ。

早速、高校生の実行委員メンバーによる司会、タイムキーピングで進行。

8分間の協働制作したプレゼンをちゃんと結論まで持ち込む発表をしていく。

WYM と同様に近年の ASEP の参加者増加によって、なるべくプレゼン壇上に生徒を立たせ発表させたいという希望と、限られた持ち時間という二律背反の状況で生み出されてきたチャット(寸劇)



形式を取り入れた傾向になるのは致し方ないことだろうか。

このB会場はコンサートホールなのでちゃんとステージに向かって傾斜のシートがありまさにフォーマルな発表会場であった。そのためか、今年の WYM で取り入れたプレゼン後に指定校を決めて質問をし、発表校は答えるという Q&A もあったが、このフォーマルさ

ゆえか質問が出にくく、やっとそれぞれ1回位であった。



午後から、体育館下のA会場に行ってみたが、ここは学生食堂のような丸椅子とテーブルにステージがあるというB会場とはまったく雰囲気の異なる会場で、なにか生徒集会でもしている若干インフォーマルな雰囲気のある会場で、午前中から聴取している先生に聞くと、質問は活発で結構突っ込む内容もあるとことで、それは2会場の「場の雰囲気」がそうさせているのではないかと思った。

さて、プレゼンの内容はどうだっただろうか。

去年のテーマ「Save the doll name is ...」という人形の名前を決めてそれをなぜ助けるのかという取りようによっては難解な結論のプレゼン作成・発表とは違って、今年は「Travering and Learning」という、この ASEP で台湾に来ている日本の生徒達自身の立場のような一見してとらえやすく見えるプレゼンテーマであったが、やはり落とし穴はあった。

つまり、多くのプレゼンは旅行して異文化の気付きやそれを克服する、あるいは観光情報に近くもう一步「learning」と言う意味がどこにあるか、の探究のプレゼンをしてくれるところがほとんどなかったように思える。



影戸先生が日頃より学部で学生たちや WYM 実行委員会でおっしゃっておられるように、特に ASEP のように観光でなく外国を旅した場合、単に思い出作りではなく見聞きしたことを先生や仲間と話したり振り返ったりして、「どう内省化できるか」が「learning」の神髄ではないかと思うのだが。もう一步のところまで満足したプレゼンや、ある先生の印象では「travel」の説明をしていて、突然結論が現れたようなものが多かったとの事には同じように感じた。

10年以上関わってきているので、変遷も含めて多少厳しい見方になって申し訳ない気ではあるが、日本の学生・生徒のプレゼンでの英語表現力・デリバリー力は本当に目を見張る進歩がある。プレゼン中にその心配は全くしなかった。

堂々と自分の意見を国際的に言える日本の生徒・学生がここには確かに居るのだ。

じつは、午後にどうしても見ておきたいプレゼンがあった。B会場での最後のプレゼン。

去年も非常に素晴らしいプレゼンをして国際審査員の中でも評価の高かった、同じく今年の WYM

でも質の高い発表をした関大と輔英技科大チームだ。それぞれ昨年以来のコアメンバーでの参加なので、どういうプレゼンに仕上げたか気になった。



プレゼン自体はデリバーも含めて安定感があり、でも途中でなんだか同じように体験した「travel」の説明に入ってあれあれ、と思っていたら最後の結論は「Travel を通じてみなさん自身の本のページにみなさんはいったい何を書くの?」という投げかけで締めて、自分に、自分を、振り返らせる喚起をしてプレゼンをしめたのはさすがだった。

こうして、プレゼンはすべて終了し、アフターパーティーと結果発表へとまた体育館へ。

B会場のコンサートホールを出る際、最後のプレゼンを終えた関西大の永田さんにであった。

「とてもよいプレゼンでした。特に最後に聴衆に問いかけたところは。」と声をかけたら、永田さんは「私たちもプレゼンは単に話すスピーキング(思いを話す)だけでなく、語りかけるトーキング(相手と思いを話し合)にいつもこだわっています。」と、いつものように涼やかな眼差しで答えてくれた。彼女は福井商業の高校時代からの ASEP/WYM 経験者である。

どういう訳か WYM でも参加の女子高校生に人気があり、おそらくは一番身近な目標とできる「先輩」なのだろう。



何はともあれ、学生・生徒たちにとって最大のプレッシャーだったプレゼン発表は終わった。今回初めて「大人」の参加者として参加した OG の須藤さんが「始まる前は長いと思ったけれど、あっという間に全部終わってしまいましたね。」と感想を述べるほどに充実したプレゼン発表はおわって、アフターパーティーへ。

いつもなら、その前に評価の各賞発表と授賞式があつて悲喜こもごもが繰り広げられ、そして何もかも忘れてのパーティーなのだが、今年はパーティーの後に授賞式とちょっと最後までやきもきするような進行。パーティーの途中で帰ってしまうのを防ぐためのようだが、あとでバーヨウコウで審査担当の先生から聞いて分かった事だが、昨年とちがいで、各発表校で審査のルーブリックの各項目での一番良い得点がそれぞれの賞になったようで、特に全体で優劣はつけず結構順位を気にする台湾としては意外な配慮と感じた。まあ、WYMもASEPもプレゼンコンテストではないという考えから発生しているのでこれはこれで良かったのかもしれない。



ということで、21時近くまで生徒達の歌や踊りのパフォーマンスを鑑賞することと相成った次第。

国の予算補助でやってくるインドネシアはその事情から大がかりな衣装と道具で民族舞踊や演奏を実演するのはお約束として、その中で同行の須藤さんがつぶやいた。「インドネシアの学校のグループって、各学校グループに必ず1人太目の男の子が居ませんか？」

言われて見てみると確かに1人は必ずいる。今後「ASEP 須藤の法則」と呼ばせてもらいましょう。私の個人的見解では、「ウチの国はそれなりに衣食住が行き届いていて、ほら、こんなに栄養一杯の生徒もいますよ。」と国際的にアピールしているのではないだろうか。まあ、自分の学生時代と親しみのある体形なので、仲間のようで好感持てます。はい。



それにしても、高雄女子高ダンス部のエモーショナルな衣装とダンス。これが高校の、教委の主催行事で許されるところが台湾らしい。聞くところによると、来年高雄女子は大規模改築で高雄高に校舎を借りて女子高生が通学するという。台湾南部随一の高雄高(男子校)の進学実績が下がらなければ良いが、とバーヨウコウで話題に上ったが、「私は国立台湾大学を志望する」高雄女子生徒が言えば逆に彼女と同じ

じ大学に行こうとかえって張り切るのでは、という意見も。ともかく、こんな高雄女子ダンス部のダンスを見せつけられた高雄男子は大丈夫なのかちょっと来年が心配。



来年の担当校であるセントポール高校に ASEP の大会旗が渡された後、2030年までの担当校の抽選と発表。

えっ！2030年！ 後、15年は ASEP が開催されるということ！

長年参加の日本教員の間でちょっとした驚き。

というのも、ASEP 開始当初の2000年始め、当時は教委の主催でもなくシルビア先生が文部省など駆け

ずりまわり開催支援を取り付け、それがダメなら来年は開催できないという、毎年綱渡りのような時期を体験しているものでにわかには信じられず、確かにアナウンスの英語は聞き取り理解したつもりでも、「えっ！2030年までだって？」っと何度もまわりの日本人先生に聞き直していたのは私だけではなかったはずだ。



日本チームは合同でいつもの西先生のリードでのクリスマスソング。今回初参加の神戸大付属中等教育学校は WYM/ASEP では比較的珍しい男子生徒のリードボーカルでの歌。これがまたなかなかうまく、多分台湾女子高生の心を驚掴みにしたようで黄色い声援が響いていて、この後多分スター並の人気になることは今までの ASEP の経験から大きなはずれはないだろう。

そうして、パーティーの最後はどんどんステージに上がって、ステージ前にでてきて、大ダンス大会で盛り上がる。

今回初参加の日本の若い先生と話していて、このアフターパーティーにもとても感動していたよう。まさに、2000年に初参加で来た私たちと同じ感動をしていたよう。

プレゼン大会・国際交流など学校(高校)の公式行事のなかでも、生徒のエネルギーをちゃんと発散させる場を設けているところに台湾の学校の奥深さがある。本音として、特にこの年代の理屈ではない個々のエネルギーの発散の場の TPO を心得ている、と見た。この生徒の多面を受け止める場を学校が持っているという事の意味は何なのか。



こうして、9時過ぎまででやっとな解散。折から、高雄高校周辺にある進学塾の送迎と高雄高校からの下校の送迎で校門前は大混乱。

体育館の出口ではおそらくは日本と高雄の交流校の女子学生が抱き合って涙を流しながら別れを惜しんでいる。かつてまだ日本参加が総勢50人弱で団体行動していたころに別れの高雄空港のあちこちで見られた光景。この光景を見るために、あるいは生徒を

この光景の主役にさせるために来年、必ずいつか、ASEP に生徒を連れてくる、と心に誓った先生方の輪が今年は150人近くの参加になった。

あすの高雄空港、左榮駅では間違いなくこの光景が繰り広げられる。それは昨年もそうだがことしも海外から ASEP に参加した者、そして地元で歓迎した者にとって何かを達成したと心に刻んだ瞬間なのだろう。

こうした事情で例年になく開店が遅くなったバーヨウコウ。それでも、この余韻と達成感を共有したいと思う心は先生方とはいえ同じで、明日4時起き、5時起きで出発でも予想外に顔出しが多く、追加のビールも買出しへ。

そうして、1時をまわるころには、たくさんもらったお土産を心のお土産といっしょにパッキングするために、それぞれの部屋にお戻りで、来年 WYM 実行委員会でお会いするのを楽しみにそれぞれのお部屋に。

こうして、12年目のバーヨウコウは閉店の時を迎え、皆様ご来店ありがとうございました。
また、いつかどこかで、バーヨウコウで。

